

太田治子さん

(作家)

不器用に、正直に、生きた浅井忠

太田さんの最新刊、『夢さめみれば——日本近代洋画の父・浅井忠』（朝日新聞出版）は、日本の近代化という時代の波にもまれながらも、一途に絵を描き続けた浅井忠（一八五六〜一九〇七）の姿が描かれている。太田さんが描き出した浅井忠の魅力と、彼が生きた明治という時代について聞いた。

一途な浅井忠の生き方

——浅井忠を描こうとしたきっかけはあったのですか。
私と浅井忠の出会いは二十代のころ、東京・東銀座でしがないOLをしていたときのことです。勤め先がブリヂストン美術館に近かったこともあり、よく足を向けました。ブリヂストン美術館は印象派を中心とする多くの名画があり、都会のオアシスですね。そこで浅井忠の『グレーの洗濯場』に出合ったんです。掌に乗るくらいの可愛い絵です。描かれた青く澄

んだ川の水がさやかで、観ていると心が洗われていくようでした。そのときは、浅井が一体どんな画家であるのかわかりませんでした。こんな絵を描く人はきつと心の清らかな人だろうと憧れを抱いていました。その後、縁あって一九七六年から四年間、NHK「日曜美術館」のアシスタントを務めたのですが、浅井忠を取り上げた回があり、そこで初めて浅井がどういう人物なのかを知ったのです。想像していたとおり、清らかな人だったので、ますます関心を持つようになりました。

浅井は明治の初期に、工部美術学校で洋画を学びました。立身出世をし、お国のためになることが尊ばれていた時代です。多くの画家もまた、日清戦争や日露戦争の戦勝画を描き、お国のために絵筆を取った。そういう時代にあっても、浅井は、日清戦争後もう戦争は題材にしたくないと言い、断固として描かなかつた。あの時代、有名な画家が戦争画を描くことを断るといのは、たいへん勇気のいることだったと思います。浅井はそういう面でも強い信念の持ち主でしたね。彼がパリに留学したのは、四十年代半ばになってからです。彼はそこですばらしい絵を描いた。パリで遅咲きの才能が開いたんですね。夏目漱石を訪ねてロンドンへ行くのですが、漱石の前で描いたといわれる『にわとり』は、とさかの赤が印象的な、とても生き生きとした絵です。ロンドンには色がないと嘆いていた漱石は、ロンドンには生き生きとした色がたくさんあるじゃないかと言った浅井に驚かされたと言っています。ヨーロッパでの潑刺とした浅井の様子は、こんなエピソードからも伝わってきますね。

●おわた・はるこ 明治学院大卒業 高校二年のときに書いた手記「十七歳のノート」が話題となる。一九八六年『心映えの記』で坪田譲治文学賞受賞。主な著書に『母の万年筆』『私のヨーロッパ美術紀行』『絵の中の人生』『青い絵葉書』『風の見た夢』『恋する手』『石の花』林美香子の真実『明るい方へ——父・太宰治と母・太田静子』『時ヲシスハ』など。



近代化を果たし欧米に追いつくことが国是だった当時は、立身出世をし、お国のためになることが尊ばれていた時代です。多くの画家もまた、日清戦争や日露戦争の戦勝画を描き、お国のために絵筆を取った。そういう時代にあっても、浅井は、日清戦争後もう戦争は題材にしたくないと言い、断固として描かなかつた。あの時代、有名な画家が戦争画を描くことを断るといのは、たいへん勇気のいることだったと思います。浅井はそういう面でも強い信念の持ち主でしたね。彼がパリに留学したのは、四十年代半ばになってからです。彼はそこですばらしい絵を描いた。パリで遅咲きの才能が開いたんですね。夏目漱石を訪ねてロンドンへ行くのですが、漱石の前で描いたといわれる『にわとり』は、とさかの赤が印象的な、とても生き生きとした絵です。ロンドンには色がないと嘆いていた漱石は、ロンドンには生き生きとした色がたくさんあるじゃないかと言った浅井に驚かされたと言っています。ヨーロッパでの潑刺とした浅井の様子は、こんなエピソードからも伝わってきますね。